

(8)

宮城学院女子大学発達科学研究
2019. 19. 8-16

東日本大震災の長期的影響と今求められる支援者支援 ～一般社団法人東日本大震災子ども・若者支援センター 2018年度活動報告～

柴田理瑛^{1,2}
平野幹雄^{1,3}
西浦和樹¹
足立智昭¹

震災復興心理・臨床教育センターでは、2011年9月より被災者や被災者を支援する立場の人々に、心理教育による研修や個別相談などを無償で提供してきた。2018年1月、これまでの心理支援だけでなく、医療、教育、福祉などの分野にわたって総合的・長期的な支援体制を構築するために、一般社団法人東日本大震災子ども・若者支援センターを新たに設立した。本稿では、本センターに寄せられた相談内容や利用者数等をもとに、1年間の振り返りを行いながら、今年度行われたいくつかの具体的な取り組みを中心に報告する。

Keywords：東日本大震災、トラウマ、アウトリーチ、気になる子ども、ワールドカフェ、北海道胆振東部地震

1. はじめに

東日本大震災以降、子ども・若者はそれぞれに震災の体験を背負い、身を削りながら学び続けている。専門的な支援に繋がることができた子ども・若者もいれば、支援が必要と判断されるにもかかわらず、専門的な支援に繋がることができなかった子ども・若者もいる。彼らの中には、被災したふるさとの復興や自分の体験を次の世代に繋がりたいと願い、活動の場を求めている若者もいる。こうした子ども・若者が震災の体験を抱えながら成長し、大人になっていくためには、継続的・総合的に支援を続ける体制を構築すべきである。

阪神淡路大震災では、20年間の支援の必要性が語られているが、さらに広域で厳しい被害を受けた東日本大震災では、それ以上の期間の支援が必要である。しかしながら、これまでの子ども・若者支援に見る限り、総合的・長期的な支援体制が構築されているとは言いがたい。

筆者らは、2011年9月以降、震災復興心理・臨

床教育センターを立ち上げ、被災者や被災者を支援する立場の人々に、心理教育による研修や個別相談などを無償で提供してきた。今後は、子ども・若者の成長と発達を、被災体験を抱えながら成長する子どもの視点を踏まえ、心理だけではなく、医療、教育、福祉などの分野にわたって総合的・長期的に支援することが必要である。そこで筆者らは、震災復興心理・臨床教育センターの事業を引き継ぎ、これまでよりも総合的・長期的な支援体制を構築するため、一般社団法人東日本大震災子ども・若者支援センター（EJセンター）を新たに立ち上げることにした。本稿では、2018年度のEJセンターの活動についてその概要を報告する。

2. 本年度のEJセンターの活動概要について

本年度のEJセンターの利用者（2018年12月現在）は、延べ4567名の利用があった（Figure1）。活動内容別にみると、2015年度からの傾向に引き続き、アウトリーチ活動に関する利用が最も多くなっており、2018年度は前年度よりも延べ960名以上も多い利用があった。これまで述べてきたように、EJセンターに寄せられた相談内容の大

1. 宮城学院女子大学発達科学研究所
2. 東北福祉大学
3. 東北学院大学

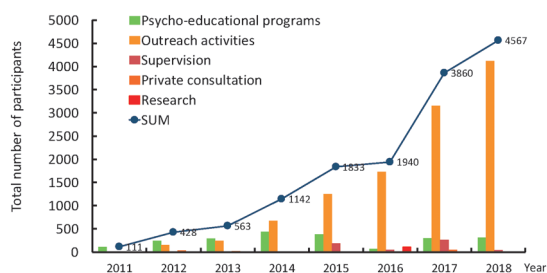


Figure1 年度およびEJセンターのプログラムごとの参加者数

半は、子どもの暴言・暴力といった衝動的で攻撃的な行動への対応であった（柴田ら、2017; Shibata, 2019）。今年度は、こうしたアウトリーチ活動を引き続き活動の軸にすえながら、その他に下記の事業を主に展開してきた。以下順に報告する。

1) 学童保育のスタッフを対象とした連続講座の実施

本年度は、県内の学童保育のスタッフを対象とした連続講座を企画した。研修のタイトルは、学童保育における子ども育て ―「子どもは宝」の視点から―とし、学童保育に携わるスタッフと発達心理学・心理療学者が、保護者との連帯を意識した大人同士の安全で創造的な対話の積み重ねから、子どもたちに「今、ここで」「どこに向かって」「具体的に何に取り組むのか?」を伝え、共に働けるようになることを目的とした研修をおこなった。講師には前国際基督教大学准教授の西川昌弘先生をお迎えし、月に一度の割合で日曜日の午前中に仙台市内の会場にて5回の研修をおこなった(同一の内容のものを前期、後期と二度行った)。参加者数は合計で20人であった。

研修内容は具体的に以下の通りであった。第一週は、学童保育スタッフが出会っている課題の共有、トラウマ治療1「気候の呼吸法による五感の覚醒」を、第二週は、学童保育における子どもの攻撃行為、トラウマ治療2「二者一対場面における個人の心的安全空間の構成」を、第三週は、学童期の子どもの発達段階と親(保護者・職員)の養育課題、トラウマ治療3「二者の協力によるノイローゼとは違う内的対話の実現」を、第四週は、

学童保育における活動目標の探求、手を使った工作活動の実際を、第五週は、まとめと今後の課題の整理と共有をそれぞれテーマにした研修がおこなわれた。参加者は、回を重ねる毎に自己の学童保育上の課題に対する認識が深まる様子であった。いくつかの問題が改善されたとの報告もあり、次年度も継続が期待されている。

2) 震災後7年が経過した、県内の気になる子どもの心身状態に関する調査

筆者らは、震災後7年以上が経過した現在、気になる子どもの心身状態についてどのような特性が見られるかを明らかにすべく、質問紙調査を行った。本調査では、宮城県内の11保育所を対象とし、各所の保育士が気になる子であると認識している119名を対象とした。そのうち、欠損値を含んだ11名を除いた108名分の回答を分析に用いた(男:74名、女:34名、平均年齢4.11歳、SD:1.28)。調査を実施するにあたり、気になる子どもの行動尺度を作成した。予備調査および筆者らによる保育所での研修会や事例検討で頻出されるエピソードをもとに、41の項目を新たに作成した。回答者は、自身が想定した気になる子どもについて、「全く見られない」から「かなり見られる」の10段階で評定を行った。その他、回答者の基本属性として勤務地、保育所名、在所児の人数構成、想定する子どもの年齢と性別を記入した。なお、上記の全ての保育所において、調査への協力について口頭で了承が得られた。その上で、筆者らのうち1名以上が訪問し、口頭にて調査の目的や記入方法を改めて説明し、気になる子どもの1名毎に質問紙に回答してもらった。

気になる子どもの行動尺度41項目に対してSPSS (Version.23) を用いた因子分析を行った(最尤法・プロマックス回転)。第1因子は、「他の子どもを叩く」、「自分の思い通りにいかないと手がでる」といった項目に高い因子負荷を示していることから、「衝動性」、第2因子は、「落ち着きがない」、「着席が期待されている場面で立ち歩く」といった項目に高い因子負荷を示していることか

ら、「多動性」、第3因子は「コミュニケーション能力が乏しい」、「言葉が少ない」といった項目に高い因子負荷を示していることから、「コミュニケーション能力」、第4因子は「保育士と個別の関わりを求める」、「保育士のそばにばかりいる」といった項目に高い因子負荷を示していることか

ら、「愛着不全性」、第5因子は、「生活のリズムが乱れている」、「夜寝るのが遅い」といった項目に高い因子負荷を示していることから、「生活リズム安定性」因子と名づけた (Table1)。それぞれの因子の α 信頼性係数は、 $\alpha = .924$ 、 $.898$ 、 $.842$ 、 $.882$ 、 $.869$ と十分な値であった。

Table1 気になる子どもの行動尺度の因子分析結果

No.	内容	I	II	III	IV	V
Q14	他の子どもを叩く	1.019	-.161	.132	.062	-.140
Q41	自分の思い通りにいかない手がでる	.952	-.089	.046	-.069	-.036
Q24	他の子どもを蹴る	.886	-.060	.151	.043	-.205
Q37	怒りっばい	.692	.071	-.169	.020	.143
Q17	おもちゃを投げる	.689	.143	.152	.006	-.106
Q6	突然キレル	.681	-.015	-.092	-.015	.141
Q22	他の子どもとトラブルになる	.642	.189	-.219	.007	.107
Q21	暴言を吐く	.547	.240	-.193	-.159	.056
Q20	気持ちのコントロールが難しい	.449	.216	.055	-.118	.204
Q19	他の子どもに噛みつく	.439	.019	.204	.182	-.011
Q26	落ち着きがない	-.009	.953	-.065	-.012	-.138
Q29	着席が期待されている場面で立ち歩く	-.014	.834	.134	.043	-.149
Q8	我慢ができない	.137	.768	-.004	.014	-.069
Q36	一つの物事に集中できない	-.106	.726	.188	.053	-.146
Q4	いつも体のどこかが動いている	.002	.667	-.056	.043	.062
Q13	高いところののぼるなどの危険な行動をとる	.304	.558	.101	-.082	.046
Q7	大人に対して無礼な振る舞いをする	.189	.455	-.170	.050	.150
Q9	切り替えが難しい	.293	.438	-.102	.008	.063
Q27	注意されているときに笑う	.017	.432	.280	.011	-.006
Q16	コミュニケーション能力が乏しい	.003	-.007	.869	.027	.039
Q28	言葉が少ない	.094	-.184	.682	.070	.015
Q34	目が合わない	-.068	.288	.608	-.075	.043
Q32	気持ちが上手く表現できない	.191	.051	.607	-.008	.074
Q11	1人で遊んでいる	.006	-.002	.595	.058	.053
Q1	言葉の発達が遅れている	-.191	.085	.531	-.033	.244
Q39	相手の気持ちが理解できない	.152	.339	.524	-.029	.078
Q30	保育士と個別の関わりを求める	.098	-.080	-.014	.928	-.032
Q33	保育士のそばにばかりいる	-.131	-.023	.238	.845	-.075
Q23	保育士に甘える	.126	.000	-.128	.811	.061
Q5	かまって欲しい	-.003	.210	-.241	.672	.102
Q35	知らない大人にベタベタと触る	-.141	.330	.061	.467	.095
Q3	生活のリズムが乱れている	-.145	-.016	.130	-.012	.944
Q40	夜寝るのが遅い	.109	-.277	.212	-.045	.870
因子間相関		I	II	III	IV	V
I (衝動性)			.655	-.068	.361	.369
II (多動性)				.062	.334	.451
III (共感性)					-.220	.078
IV (愛着不全性)						.265
V (生活リズム安定性)						

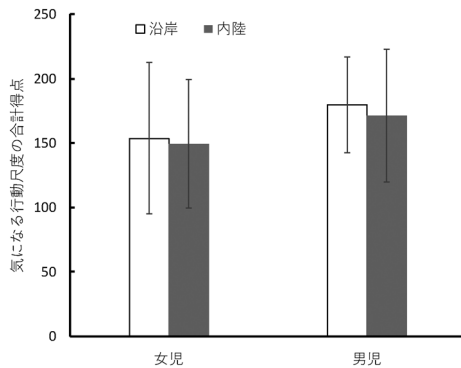


Figure2 回答者が想定した所児の性別ごとの全質問項目の合計得点エラーバーは標準偏差を示す。

次に全質問項目の合計得点および下位尺度ごとの合計得点について、津波被災地域に存在する保育所か否かと回答者によって想定された所児の性別で分散分析を行った (Figure2)。その結果、全質問項目の合計得点における性別の主効果にのみ有意な傾向がみられた ($F(1, 104) = 3.10, p = .081$)。

調査結果より、震災から7年後の子どもの気になる子どもの心身の状態について、「衝動性」「多動性」「コミュニケーション能力」「愛着不全性」「生活リズム安定性」という5つ因子が抽出された。ただし、居住地域による有意な差はみられなかったことから、沿岸被災地の保育所に通う子どもがそれらの特性をより有しているとは言いきれず、他の都道府県の保育所への追加調査を今後実施して比較検討する必要があるものと考えられた。

3) 若者たちにおける語りの場作りを目指したシンポジウムの開催

本センターでは2018年8月26日にシンポジウムを開催した。シンポジウムでは、震災を経験し、現在高校生、短大生、大学生となった若者を中心に、新たな一歩を踏み出すきっかけが今どのように自分の中で位置づいているのか、そして今後どのようなことをしていきたいか等を話してもらうことにした。第二部では登壇者と参加者を交えたワールドカフェを通じ、復興や防災、まちづくりへの新たな一歩を子ども・若者がどう踏み出すか、

踏み出そうとする彼らを地域がどのように後押しできるか、一緒に考えた。以下に、当日発表を行ってくれた学生の感想を紹介する。震災の経験から一歩踏み出した学生たちは、各々次のステージを見据えており、これまでの活動をいかにして後輩へと繋いでいくのかということが、これからの課題となっているようであった。

Project “M” 小野寺 翔

今回の意見交換会は、これまでよりも、「若者がお互いの未来を語り合う」という要素が重視された内容になったと思う。一部では、大学生になった山田町のZoo caféメンバーの報告から始まり、福島の学生からの報告、アメリカから帰国した同級生の報告から、私の報告へと続いた。これまでも意見交換会は数を踏んできたが、今回新鮮だったのは、団体の活動報告ではなく“私個人の震災からこれまでの歩みと、これからの展望 若者向けに”発表するという点だった。

私的な内容となったが、発表を通して、震災から現在までの7年半の経過の中で、自分がどのような影響の元にどんな選択をしてきたのかを改めて整理することができた。二部では、登壇した若者を中心として、若者と支援者を混ぜたグループに分け、ワールドカフェを用いたワークショップが行われた。ワークショップには一部傍聴の学生も数名参加したが、故郷の後輩も参加してくれていたのは非常に嬉しかった。しかし、全体的には若者の参加者が少なかったため、活動に意欲があっても思いのある学生をもっと巻き込めれば良いのかなと感じた。今後の活動の継続には、自分たちも関わっていくものの、世代交代という意味で、学生の時間の中で私たちが行ってきたことの火種を次に世代に渡すということも必要だと思う。

私も来年度からは社会人となるので、次の学生のチェンジメーカーをどのように生み、育てるかを考えるためにも、このように若者たちが集う機会と場所は継続的に作っていければと思う。

Project “M” 阿部成子

今回の意見交換会は、発表の中でも言った通り、帰国前から楽しみにしておりました。というのも、この意見交換会は自分が震災後に行ってきた活動、その中で感じた気持ちの変化を人に話す事で自分なりに整理する、とても貴重な場です。今回は特に、1年ぶりの参加となったので、Project “M” のメンバーも含め、皆様の新たな一歩を知ることができて、大変刺激的な時間になりました。私自身も、留学の総括を発表する機会が帰国後初めてでしたし、これからもなかなかこのような機会はないと思うので、しっかりと自分の1年を振り返るきっかけを作ってくくださった点においても、森田先生をはじめ東日本大震災子ども・若者支援センターの方々、森田ゼミの学生の皆様には大変感謝しております。私ごとではありますが、この1年の留学で得た経験は、私の人生の中で東日本大震災に次ぐ重大なものだったと感じております。学んだことを常に振り返り、人に伝え、活かして活動していくことが、この留学を可能にしてくれた多くの人々への感謝を伝える方法だと思っております。まだまだ未熟ではありますが、常に学ぶ意思を持ち、成長していきたいと思っておりますので、これからも変わらずに見守って頂けたら幸いです。

山田町Zooカフェ 上沢りえ

(岩手県立大学盛岡短期大学部1年)

第1部では、宮城県出身の皆さんと福島県出身の皆さんの報告を聞き、他県で行われている活動について、より深く聞くことができました。福島県出身の二人が、高校1年生であるにも関わらず、堂々と報告する姿に感動しました。宮城県南三陸町出身の阿部成子さんの報告は、個人的にもとても参考になるもので、留学していた1年間に行なった活動内容やその量に驚きました。アメリカ国内の3つの地域に行き活動したということで、行動力があってすごいなと思いました。私は2週間ほどアメリカ研修に行くので、実り多き研修にしたいと感じました。

第2部では、「この夏、困ったこと」「最近モヤ

モヤしていること」「今後、やってみたいこと」の3つの簡単なテーマで話が展開されたため、とても話しやすかったです。進路のことでモヤモヤしていましたが、多くのアドバイスを頂いたので、参考にしたいと思いました。また、今後のカフェについての提案も頂いたので、その提案を山田に持ち帰り、実現できるか話し合いたいと思いました。今回は、3回に分けてグループで話し合ったため、発言する機会が増え、高校生から大人まで多くの意見を聞くことができました。良い刺激になりました。また様々なお話を聞くのが楽しみです。

山田町Zooカフェ 小林未空

(盛岡大学短期大学部1年)

私は今回の意見交換会に参加してZoo cafeについて発表するときはとても緊張しました。高校生の意見を聞いて、高校生なのに内容も濃くてすごいと思いました。発表にしっかりと自分の気持ちも入れていてとてもすごいと思いました。Project “M” の意見を聞いて、自分の過去の話とかもありとても聞きやすかったです。留学の話も聞けて面白かったし留学をしたことが他の人にはない強みになるということを知ってすごいと思いました。

ワールドカフェの時は自分の意見を真剣に聞いて頂き、とても話しやすかったです。Zoo cafeの後継者がいないという話をしたら解決策をたくさん考えて頂き、「学校の先生に協力してもらい後継者を探す」「役場に協力してもらい後継者を探す」などたくさん意見を頂き、ありがたかったです。質問されて上手く答えられない時は細かく説明してくれて分かりやすかったです。グループを30分ごとに変えたことにより様々な人とお話ができたのでよかったです。今回の意見を今後役に立てていけるように頑張りたいです。

山田町Zooカフェ 佐々木麗緒

(盛岡大学1年)

今回の意見交換会では、踏み出した一歩を聞く

ことができても自分ももっと頑張ろうと思いました。いろんな人たちの前で話すのは何回もしているけど緊張しました。いつもうまく喋れないので、もっとしっかりとしたことを堂々と喋れるようにしたいです。福島の高校生たちの話を聞いて、福島との違いなどを感じました。高校生なのに堂々と話していてすごいなと思いました。南三陸の人たちの話は自分のやりたいことをやっていて、やっばりすごいなと思いました。自分もいま出来ること、やりたいことをしていきたいと思いました。また、これからの将来についてもしっかりと考えていきたいと思いました。

ワールドカフェでは、最初は緊張しましたが、いろいろな人たちと楽しく話をすることができました。自分と同じ考えの人や自分と違う考えを持っている人と話すことでたくさんの意見を聞くことができました。これからのカフェについてももっと考えていきたいと思いました。

これからもこのような活動に参加したり、レインボーハウスでみんなでいろいろな活動が出来たらいいなと思いました。いつもたくさんの方々話を聞いてくださったり、応援してくださっていてありがたいと思いました。

山田町Zooカフェ 高村侑奈

(青森中央短期大学1年)

自分たち以外の発表を聞いて、思うことがあったり、高校生がとってもしっかりと話していてすごいなと思いました。高校生や阿部成子さん、三瓶諒くん、小野寺翔さんの発表も聞いてみて自分たち以外にもいろいろな活動をしていて、それぞれ震災を経験して今の自分にできることを実践していて、行動を起こしているのがすごいと感じました。

ワールドカフェではメンバーが変わり、色々な人の意見を聞くことができても勉強になりました。メンバーが変わって緊張して話し合いに参加できるか不安だったけれど、自己紹介の際にテーマを交えて自己紹介をするというのがあったのでその後の話し合いがとてもスムーズに行くことができましたので良かったです。Zoo Caféのことについ

での意見を頂いたり、その他今後やってみたいことなど共有することができたのでとても良かったです。Zoo Caféの後継者についてもたくさんアドバイスをいただいたり、活動についてのアドバイスをいただいたりとても良い意見交換会だったなと思いました。

山田町Zooカフェ 湊日和

(岩手県立宮古高等看護学院1年)

今回の意見交換会に参加して、たくさん勉強になりました。同じ年代の方の発表で、前回の時よりも新しい話が聞けて良かったです。高校1年生の発表では、自分が高校1年生のときと比べものにならないくらいしっかりと話していて、刺激になりました。レスパイトの活動について分かりやすく発表していて、レスパイトの活動に興味を持ちました。機会があればレスパイトの活動に参加してみたいです。留学した大学生の話やきっかけ、南三陸町出身の大学生の昔話なども聞いて勉強になりました。Project“M”という活動では東洋大学の学生も呼んで一緒に活動に参加したいと話していて、自分たちも次に向けて何か考えていかなければならないと感じました。さらに、自分たちの活動も発表することができました。

各グループに分かれての意見交換では、全体のテーマをもとに話し合いました。自分たちの活動のことを話すだけでなく、他の地域のことも知り、課題について一緒に考えることができました。とても話しやすい環境だったので、Zoo cafeのことだけでなく自分の将来の話もすることができました。久しぶりに関わった人もいたので楽しかったです。ありがとうございました。

三瓶諒

(青森公立大学1年)

今回は〇〇さんからお誘いをいただき、急遽ではありましたが、意見交換会に参加させていただきました。参加しようと思った理由は、以前よりも知識が増え、より正確に自分の言いたいことが伝えられるということと、他の人の考えを聞き自

分の考えをより深める良い機会になると思ったからです。

私は、高校時代から、地域の人に積極的に働きかけて行動する友人を見て、「自分も何かしなきゃ」と感じていたものの、「何をすればいいのかわからない」という状態に陥って苦悩していました。しかし、今回の意見交換会に参加し、話をしたり聞いたりしたことで、自分の中で何がしたいのか少し整理ができたような気がしています。今後は、地元である福島県双葉郡の復興の現状を伝えられるようなツアーを企画したいと考えています。近い未来、日本中の地方で起こる人口減少という問題に、一足先に直面した東北の被災3県でそのような活動を行って、どのように復興してきたのか伝えることには大きな意義があります。また、今回のような「話せる場」を地元でも作り、「何かしたいけど何をすればいいのかわからない」と悩んでいる中高生の後押しができれば良いのではないかと考えております。

4) 北海道胆振東部地方を震源とする地震の支援について

2018年9月6日3時7分に、北海道胆振地方を震源として発生した地震について、安平町災害ボランティアセンターから「子どもの心のケア」の支援要請を受けて、現地入りして関係者から情報収集及び教育関係者への支援を行った。特に、今回の報告では、災害時の初動体制に着眼して報告を行う。

第1回支援活動（2018年9月12日から14日）の概要とポイント

地震発生日からFacebookとメールで少しずつ現地の情報が入り始めた3日後（9月9日）、メールとFacebookを使って、震源地にほど近い安平町のこども園園長（後に安平町の災害ボランティアセンター長として活動）に連絡を取って、子どもたちと保育者への支援が必要かどうかの確認を行った。同時に、東日本大震災子ども・若者支援センターと連絡を取りながら、日本臨床発達心理

士会に災害派遣の要請が安平町災害ボランティアセンターからあったことを報告した。その後、災害支援の事前準備が整ったところで、3日間の日程で現地での情報収集を行った。この当時の様子を振り返ると、安平町内の子育て拠点となっているこども園の園長が災害ボランティアセンターを兼任したことで、情報収集と意思決定が迅速に行われたことが伺える。

地震発生から6日後の支援活動初日の現地の様子について、安平町のこども園の様子はウッドデッキなどの破損が見られる部分の撤去が進んでいるものの、廃材が園庭に積まれたままになっていた。また、園舎など周辺の建物では断水の影響でトイレの水が使えない状況となっていた。子どもたちの様子について、登園している子どもは普段と状況が違うためにテンションが上がっているという事前報告を受けていたが、サポート当日は落ち着いているように見受けられた。比較的、地域のネットワークが温存されている状況が確認された。

また、震源地にさらに近い厚真町の教育関係者の様子を確認するため、アポイントなしで小学校とこども園を訪問した。その際、特別支援学級に通っている自閉症児が震災後に赤ちゃん返りの症状が見られること、さらに母親が不安を抱えているのでカウンセリングが必要な状況であることが小学校の養護教諭から情報提供があった。支援活動初日は、教育関係者からのヒアリングを行うことで、災害時の心理的支援のニーズを把握することの重要性を確認した。

支援活動二日目。既に現地入りしている臨床心理士から、北海道NPOサポートセンターと全国災害ボランティア支援団体ネットワーク（JVOARD）が主催する「平成30年北海道胆振東部地震 情報共有会議」が苫小牧市で開催されるとの情報を得て、情報共有会議に参加した。今回の災害支援では、この情報共有会議に参加し、行政、NPOなどの災害ボランティア、心のケア団体など、各団体からの災害弱者への支援状況が手際よく書き出され、災害支援の現状と課題を確認

することができたことで、後の支援計画を立案するのに役立った。また、情報共有会議の情報を安平町と厚真町に持ち帰り、今後の支援活動計画を検討した。

3. まとめ

まもなく東日本大震災から8年が経過しようとしている現在、利用者の増大にも明らかなように、EJセンターの地域における役割はますます重要性を増している。上述した以外にも、昨年度に引き続き、震災直後から被災地で遊戯療法を実施してきた仙台セラピ・ド・ジュ研究会、虐待の予防活動を行ってきた日米親子ネットとの共同事業も実施した。

このようなEJセンターの活動成果は、国内有力学会におけるシンポジウムにおいて報告され、上述した以外にも、柴田・平野・足立は、2018年8月にアメリカ合衆国サンフランシスコにて開催されたAmerican Psychological Association 2018 annual meetingの国際シンポジウムにて、足立、平野、柴田はそれぞれ2018年3月に東北大学にて開催された日本発達心理学会第29回大会における学会関連企画シンポジウムにて話題提供をおこない、本センターにおける震災後の取組みをそれぞれ報告した。一般社団法人となった本年度も、継続して国内外の研究者および支援者と情報交換を行うことができ、EJセンターの活動を国内外に発信することができた。

一方、筆者らがアウトリーチ活動で出会う保育士、学童保育指導員、保健師の疲労の色は濃く、あたかも震災から2、3年後の状態に戻ったかのようである。これは、震災の2次的、3次的影響としての家族機能の低下と、それに起因する子どもの多様な問題行動の発生に、現場が対処しきれないための現象と考えられる。西浦の北海道胆振東部地震における支援報告からは、改めて心理支援のニーズ把握の重要性が指摘された。迫り来るメガ災害に備えるためには、波状的に被災地を襲うであろう2次的、3次的課題にも対応できる国家レベルでの支援者支援プログラムの構築が急が

れる。

引用文献

- 1) 柴田理瑛・平野幹雄・西浦和樹・足立智昭 (2018). 保育・教育現場における子どもの攻撃性とその対応について. 2017年度ライオンズクラブ心の復興プロジェクト震災復興心理・教育臨床センター活動報告. 宮城学院女子大学発達科学研究, 18. 77-80.
- 2) Shibata, M (inpress). Laurea-TFU Joined Publication New ways of promoting Mental Wellbeing and Cognitive Functions. In Niiniö, H., Putkonen, P., & Hagino, H. (Eds.), The current status of childcare in Tsunami-affected areas of Miyagi and The possibility of using VR technology in caregiver training. Laurea Publication.

研究成果

1. 平野幹雄：東日本大震災による心的外傷体験が子どもの発達に与える影響-幼児期の心的外傷体験-。日本発達心理学会第29回大会委員会企画シンポジウム。東日本大震災による心的外傷体験が子どもの発達に与える影響。話題提供。東北大学。2018年3月。
2. 柴田理瑛：学童期・思春期の心的外傷体験。日本発達心理学会第29回大会委員会企画シンポジウム。東日本大震災による心的外傷体験が子どもの発達に与える影響。話題提供。東北大学。2018年3月。
3. 足立智昭：失敗から学んだこと。日本発達心理学会第29回大会学会関連企画シンポジウム。東日本大震災後の継続的な心の支援の必要性について5。東北大学。2018年3月。
4. Shibata, M., Hirano, M., & Adachi, T.: Psychological Support for Victims after the Great East Japan Earthquake. (Homma, T.R. ed.) Developmental psychology's contributions- healing children from disasters and traumas. American Psychological Association 2018 annual meeting, San Francisco, August, 2018.

謝辞

本年度のEJセンターの運営にあたり、仙台青葉ライオンズクラブ、京都北ライオンズクラブ、全労済、日本BPW連合会、子どもの人権連から助成を受けた。北海道胆

振東部地方を震源とする地震の支援については、2018年9月12日から14日、9月27日から30日、10月24日から27日の計3回は日本臨床発達心理士会、12月5日から7日は日本財団から活動の助成金を受けた。また、本研究の一部は、日本発達心理学会「災害復興支援研究・活動」への支援事業およびマツダ財団による助成を受けて行われた。ここに記して心から感謝申し上げます。